

「東京ベイエリアビジョン」（仮称）の検討に係る官民連携チーム総括会議（第1回）

日時：平成30年12月18日（火）15時00分～16時30分

場所：都庁第一本庁舎 42階特別会議室B

【伊東計画担当課長】 定刻になりましたので、東京ベイエリアビジョンの検討に係る官民連携チーム第1回総括会議を開会いたします。

本日は皆様、お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

まず初めに、本日ご出席のメンバーの皆様をご紹介させていただきます。

官民連携チームを総括するコーディネーターの千葉大学大学院工学研究院教授、村木美貴様。

【村木コーディネーター】 村木です。よろしくお願いいたします。

【伊東計画担当課長】 続きまして、魅力あるまちづくりワーキンググループ座長の東京大学大学院工学系研究科准教授、中島直人様。

【中島座長】 よろしくお願ひいたします。

【伊東計画担当課長】 続きまして、活力と躍動感のあるまちワーキンググループ座長の首都大学東京大学院都市環境科学研究科准教授、岡村祐様。

【岡村座長】 岡村です。よろしくお願ひいたします。

【伊東計画担当課長】 続きまして、最先端技術のまちワーキンググループ座長の東京大学大学院工学系研究科特任准教授、松尾豊様。

【松尾座長】 よろしくお願ひします。

【伊東計画担当課長】 なお、松尾様におかれましては、ご都合により、おおむね15時半頃までのご参加となる予定です。

この官民連携チームは、今年10月の立ち上げ以降、ワーキンググループごとに検討を進めていただいております。本日の会議では、3つのワーキンググループからの報告を受け、ベイエリアビジョンの庁内検討委員会への提案について検討を行っていただく予定です。

なお、本会議は公開で行うため、傍聴の方や報道関係者の方も出席されていること、また、配付資料、議事録につきまして、後日ホームページ上で公開させていただくことを申し添えます。

それでは、以降の議事進行につきまして、村木コーディネーターにお願いいたします。

【村木コーディネーター】 本日はご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

今日の議事ですけれども、まず、各ワーキンググループの座長の方々から、これまでのグループでの議論を踏まえた取りまとめについてご説明をいただきたいと思います。

各ワーキンググループのご説明ごとに、質問や何かお伺いしたいことが、私の方からあると思いますので、それについて少しお話をさせていただいて、皆さんの方も他のグループの提案を聞いて思ったことや、この後どうしていったらいいのか、その辺のことを一つずつ話し合い、その後で全体での議論をしていきたいと思います。

それでは初めに、最先端技術のまちワーキンググループからの提案について、松尾座長、お願いいたします。

【松尾座長】 では、10分程度でお話しさせていただきます。まず現状認識、それからコンセプト、今後の検討の方向性という順番でお話ししていきます。

まず現状認識ですけれども、ご存じのとおりで、AIをはじめとして色々な技術が進展しています。ロボットですとか、それから環境に関するようなエネルギーの技術ですとか、色々なものが急速に進展しているという状況です。こういった技術の進展が我々社会のどういった側面に影響を与えるのかというのをマップにしたものですが、例えばフィンテックの技術、翻訳の技術、それからロボットの技術、色々な技術が我々の生活、社会に大きく影響を与えていくということだと思えます。

2040年を考えるに当たって、この技術の進展をどう考えるかという議論があるんですけども、今、目の前にある技術、実現されている技術、それから近い将来に実現されるであろう技術、ここら辺は分かるのですが、はっきり言って2040年の技術がどうなっているのかというのは、かなり想像するのが難しいところがあります。

ただ、それも想像していかないといけないだろうといったときに、現状の技術をやや高度化するもの、それが全体としてシステム化され、スマート化していくようなもの、そういうインフラも含めて非常に進んだ、色々な段階を考えることができるのかなと、段階に応じて色々な想像をしていくことが重要なのかなと思っています。

もう一つの側面としては、やはりバイエリア、東京ならではのところと、この技術をどう考えていくのかというのが重要なかなと思っています。

もう一つバイエリアの地理的な特性、これに技術をかけ合わせていくことになるわけですが、我々のワーキンググループでもこの辺の話はかなり出まして、バイエリアの特性として、水に囲まれた土地であるということ、それから人や物が自然に集まるハブの

エリアであること、それから6つの区にまたがったエリアである、こういったあたりが特性としてあるんだろうと。

さらに内陸部から臨海部にかけて、色々なまちの顔があると。古くからの下町文化もあれば、非常に新しいまちもあれば、物流の拠点、オリンピックの大会に関する場所なんかもあって、このテクノロジーとこういうまちの顔というのをうまく融合していくといいのではないかと思います。

こういった技術を使って、どういった未来を実現していくのかを考える際に、色々なアイデアが出たのですけれども、何のためにやるのかという目的は非常に重要だという議論が出まして、どういったことを目的にしていけばいいのかというときに、1つ目は、大きな固まりとして出てきたのは、サステイナブルな社会の実現ということで、昨今SDGs等よく言われていますけれども、やはり社会全体、地球全体につながるようなテクノロジーを産み育てていくようなまちでありたいのではないかと。

日本は色々な課題がありますし、それから、そういった課題と世界が向かうことが予測される未来は、ある程度オーバーラップしている部分がありますので、こういう新しいテクノロジーによる解決を世界に示せるような、そういったことにつながるというのではないかとというのが、一つのコンセプトとして出ました。

2つ目が制約からの解放と言っていますけれども、技術が進展していく中で、例えば規制とかこれまでの考え方の習慣ですとか、色々なものが制約になります。この制約がなければいけないほど、やはり新しい技術を実現したい、世界中のエンジニアにとっては魅力的なまちになってくる。もちろん技術者にとってだけではなくて、生活する人にとっても、例えば渋滞から解放されるとか、言葉の問題、色々な国から人が来られた時に、言葉が通じないという問題から解放されるとか、そういったことをあわせて考えると、制約から人々を解放することが一つのコンセプトになるのではないかとという議論が出ました。

今後どういうふうに検討していくかということになりますけれども、大体この3つぐらいの大きな固まりなのかなと思っていて、テクノロジーと、ベイエリアらしさとか色々な要素を合わせたような、こういう未来のシーンを想像しながら、それを描いていくということが1つ目、2つ目が、このテクノロジーが集まる・育つようなまちにするためにはどうしたらいいかということ、3つ目が、技術者が集まるまち、育つまちにはどうしたらいいかということを考えていきたいと思っています。

この1番のところに関してですけれども、ワーキンググループの中ではかなり具体的な

話も含めて議論されておりまして、これはまた次回以降にご紹介できればと思いますけれども、例えば具体例として、このバイエリア内でエネルギーが完結するようなまちにできないかというアイデアもあります。

このバイエリア内は色々一つの固まりとして考えやすいので、エネルギーがこの中で完結するようなものは、地球の未来社会、未来の地球を一つあらかわすようなものになるのではないかとか、それから食に関して、豊洲市場もありますし、それから最近調理ロボットが非常に進んでいまして、こういうのをを使って自動に調理がされる、そこに多くの海外の観光客が来るような、食に関して非常に進んだまちが描けるのではないかというのがあります。

それから、交通等の色々なインフラが非常に柔軟に運用されるような、そういった未来像を見せることもできるのではないかと。これもやっぱりバイエリア内で色々な交通システムがありますし、自動運転含め非常にやりやすい環境にあるというところで、こういったのがあるのではないかと。

4つ目に、住民の方、あるいは訪問される方に対する高度な公共サービスという観点があるのではないかと。それが例えば色々な情報をセンサーでとって、けが、病気に緊急対応しますとか、それから言語、翻訳機を介して多くの方が自由にコミュニケーションできますとか、そういったものがあるのではないかと。というものです。

ここに4つほど示しましたけれども、こういったところをより詳細化しながら、今後議論を進めていきたいと思っております。

以上になります。

【村木コーディネーター】 ありがとうございます。では、座っていただいて、先生、途中で帰られてしまうので、色々お伺いしたいこともあるのですが、こういう情報、最先端技術の導入というのを考えていったときに、スピードがすごく速いですよね。時代に合わせてその見直しとか、将来の予測はしにくいとおっしゃっていましたが、そのあたりのところをどんな形に対応していくべきなのか、何かありますか。

【松尾座長】 正直なところ、2040年の技術も分からないんです。描くにしても、そういう技術を使った新しいまちのあり方の進展の一場面にすぎないということかなと思っていまして、完成することはないので、どんどん進展していくようなまちを描くという意味です。例えばテクノロジーが集まってくるとか、技術者が集まってくるとするのは、まさにそういったイメージで、ずっとアップデートしていきましょうというか、どんどん進ん

でいくような社会を描くために、そういう人たちが必要だよねということです。

あとは、そもそも社会への貢献とか地球、SDGsのようなコンセプトを一つ置いているのも、やっぱり技術のためだけになってしまうと意味がないので、サステイナブルな社会というものを目標にしながら、そこに向けて進展していくという絵になるのかなと思っています。

そうはいつでも何か抽象論だと面白くないので、技術として具体的に描けるところは、できるだけ具体的に描きたいなと思っているんですけども、全般としては段階的に進展していくという形になるのかなと思います。

【村木コーディネーター】 今の時にも、世界から人が集まってくるとか、技術者が集まるとか、そういうテクノロジーをここで育てていく。そうするとどういうことをしたらそういう人たちが集まってきて、ここに魅力があるとなるんですかね。何か今の制約とか今のやり方だったら、なかなかそんなに簡単に人は集まってこないですよ。

【松尾座長】 そうですね。制約からの解放と書いているのは、一つそういう面がありまして、例えば今の日本の中で新しい技術を使って、例えばドローンを飛ばそうと思ったときに非常にやりにくいんです。ところが、例えば米国なんかだと、決まっていないことは基本やってもいいですよ、ただ何か問題があると、そこはまたルールができますよという考え方がベースにあって、やはり決まっていないものはやってはだめという、日本のそういう空気感は非常にギャップがあって、決まっていないことは基本何でもやってもいいですよというエリアをつくりたいよねというところから、例えばメンバーの落合さんもそういうことをおっしゃっていて、その中でこういう制約からの解放というのが一つテーマとして出てきた感じです。

【村木コーディネーター】 分かりました。そうすると、そういう技術を新たにここで実験する大きな実験場のような所が、特に必要だということですね。

【松尾座長】 そうですね。それがベイエリア、色々な場所ごとに色々な顔がありますので、その実験場が色々な所にできて、色々なことができますよと、そういうところが一つ魅力になるのかなと思います。

【村木コーディネーター】 分かりました。ありがとうございます。

先生方、他に質問があったらどうぞ。

【中島座長】 大変共感する内容として、4ページの4番のベイエリア、東京ならではの技術というところが一つ大事かなと思っています。例えばニューヨークなどでは、技術

を今確かにものすごく重視していますけど、テクノロジー産業のような、既存の文化やカルチャーと技術を結びつける、つまりニューヨークの強みがそこにあるから、そこと技術が結びつけられるところで技術者が来るみたいな、そういうのがあるじゃないですか。

そのときに純粋に技術だけで東京が果たして優位性を持つのかとか、あるいはこのバイエリアの特性から、こういう技術であれば世界的に見て東京で技術者がやってみたくなるとか、何かその辺の感覚が大事なかなと思っていたんですけど、その辺はどういう議論に今なっているんでしょう。

【松尾座長】 その点非常に重要で、ワーキンググループでも結局バイエリアらしさとか、ほかの都市に比べての魅力というのをもっと追求していこうというところで、今までの議論が終わっていますので、そこら辺をこれから議論していくと思っています。ただ、話の中で出たのは、例えば羽田空港がすごく近くにある、そこに対しての人の行き来が非常に多いとか、物流の拠点がこんなに近くにあるとかいうのは、一つ特色だと思いますし、それからロボットの技術は多くの人、世界中の人が、何か日本はロボットだという印象、「バイマックス」の映画のようなイメージを持っておられるので、そういったところは一つ特色にしやすいのかなと。

あとは食文化が高いというのも、やっぱりグローバルに言ってそうだと思うので、そういったところもあるということを含めて、東京ならではの、バイエリアならではのところをもっと追求していきたいと思っています。

【中島座長】 分かりました。ありがとうございます。

【村木コーディネーター】 岡村先生、どうですか。

【岡村座長】 どれくらいの施設や空間が必要なのかという検討などはされていますか。あるいは与えられた空間でやることを考えるのかどうか。

【松尾座長】 現実的なことはあまり考えておりませんで、やはりしっかり発想を膨らませようということです。話として出たのは、例えば海の中、海中をもっと活用できるのではないとか、そういった話も出まして、ただ、技術がどのぐらい実現可能かという点からは、やや空想的な話になるので。ただ、最初からあまり空想的な話も消してしまうともったいないと思っていますので、あまりそういう制約は考えずに議論していきたいと思っています。

【村木コーディネーター】 先生、お帰りになる前に、他のワーキングの方の資料を見られていたと思いますが、自分たちのやっている技術から考えると、こういうことがある

といいなとか、何かないですか。

【松尾座長】 彼のワーキンググループの議論の中でも、やはり技術の話が少しづつ入っていて、我々の方でもまちの魅力等の話もありましたし、そんなにきれいに切り分けられるものではないのかなと思うんですけども、特に技術のワーキンググループからの視点としましては、技術の達成可能性みたいなところを少し注意しながら、色々なコメントができるといいのかなとは思っています。例えばすごくリアリティのある話をしているところに、技術だけかなり空想的なものになると、あまりバランスが良くないので、どのぐらい達成実現可能性があるような技術を想定しているのか、あとはどのぐらい未来の話なのかということも関連すると思いますけど、そこら辺は色々コメント、議論させていただける部分もあるのかなとは思いました。

【村木コーディネーター】 他に何かありますか。大丈夫ですか。

では、次は魅力あるまちづくりワーキンググループからのご提案についてお願いいたします。

【中島座長】 こんにちは。中島です。魅力あるまちづくりワーキングの提案としてはこの絵に描いてあるとおりですが、ベイエリアを幾つかの異なる大きさの空間の集合として見て、それを前提条件として、この魅力の受け皿というか、プラットフォームと、コンテンツというか、魅力を生み出すシステムみたいなものを考えればいいのではないかとこのことを議論してきました。

基本的に、東京の新しい都市づくりの考えやコンテンツを柔軟に受け入れる役割がベイエリアにあるわけですけども、2040年までって、技術の面で見ると長いというか、分からないことは多いと思いますが、年数的には実は20年後なので、既に今の課題を解決するだけでも、結構20年ぐらいかかりそうだというのが議論です。

この辺にあるのが現状の課題かなということでみんなで出し合ったものですけども、このうちの幾つかは既存の今の計画でもある程度、どうも解決されそうだということも議論しつつ、我々は考えていきました。

提案というか、議論の内容なんですけど、先ほども言ったように1つ目は、ベイエリアをどういうふうに見るかという話で、「多様なスケールの空間の集合体」として捉えて、それを器として考えていこうということ、提案2は、そのスケールと関係するのですが、大きく既にあるものをリノベーションしていかないといけない部分と、全く白紙のイノベーションしていく部分があるだろうという、そのことを今議論しているということです。

1つ目の提案ですけど、東京の魅力というのは非常にスモールな、非常に細やかな小さいものから、非常に大きいものまで色々あって、バイエリアにはそれらが全てそろっているんですけど、バイエリアの特徴は、SとかMとかLとかいうのは東京にもあるんですが、このエキストラージがあるところが、東京のほかの地域とバイエリアの違いであろうと。イメージとしては、こういうS・M・L・XLといったものが、どのように進化・融合・分裂して2040年を迎えるのかについて考えようということです。

現状を見てみると、SとかMと呼ばれているのは、ある種東京の内陸から接続する部分ですけども、その先にこのL的な空間。Lがこれだけ連担しているのは、おそらく東京では新宿西口とここぐらいではないかと思っていますが、そういう非常に大きな空間です。その先にXLという未知の可能性を持っている群。これは多分東京の中だと、あえて言うと皇居ぐらいいかなと思っています、なかなかこういう空間はない。さらにそういうものたちが囲む、内海と書いてありますけれども、海もLの海からXLの海まで色々あるよねと、まず捉えましょうということです。

その上で、ちょっと今、少しSとかMとか先に申し上げていますが、イメージとしてこういうことなんです、バイエリアの中には多様な空間のスケールがあります。もうちょっと具体的に言うということですけど、これらが集合して、さらにここにあと海がくっつくとバイエリアになるわけですが、それぞれ特徴がやっぱりある。

Sについては説明不要かもしれませんが、非常に古くからの個性的な町並みだとかコミュニティだとか、幅広い世代が住んでいるといった所なんですけれども、少し勝どきあたりのMに行くと、若干再開発された空間と古くからの町並みが隣接していたり、大通りと細い路地、そういうものが一緒に混ざったようなところがある。

さらにそれがLに行くと、おそらく湾岸のイメージを決めているのはLなんですけれども、なかなか表現が難しいんですが、まちがつけられるよりも都市開発事業が先にあるような、そういう場所があります。これは、ここでは単純に言えばスケールアウトした都市空間というか、そういうものがあって、課題は明確でございます。

それがもっと行くと、正直XLに行くと、もう広過ぎて問題でもないというか、これはどこにもないよねというものになっていく。

我々としては、今のSからLまでは、実はある程度我々の知恵とか知識で将来を考えていけるだろう、ただXLに関しては、ちょっと切り離れたほうがいいのではないかというのが我々の考え方です。

でも実際には、この図は現状の交通ネットワークと、現在計画されている交通ネットワークと、あとは将来あったらいいなというのを3つ重ねて書いてあるので、ちょっと分かりにくいかもしれませんが、現状では交通ネットワークは少し足りないんですけども、今計画されているものが2040年までにできれば、基幹的なネットワークとしては足りるのではないかとというのが我々の検証した結果です。ただ、それは基幹的なネットワークであって、こういう多様な空間スケールを結びつけるためには、より密度の濃い細やかな域内ネットワークとか、異なるスケールを結ぶ内海をどうするかという、その辺のことをこれからビジョンとして出さないといけないのではないかとということ、今議論しているところでございます。

それで先ほど申し上げたS・M・LとXLの違いというのは、S・M・Lは実は既に市街化がなされている、それに対してXLは全くないということで、我々はそれは全然ビジョンは違ってくるのではないかと考えています。もちろん共通する話として、ここに書いてあるようなベイエリアで考えなければいけないことはあるわけですけども、やはり各スケールの特徴を生かして、どういうふうにビジョンを描くかということだろうということ、これを議論の整理として、やっていることです。

少しそのリノベーションとイノベーションを分けて話していきますが、S・Mのエリアというのは、正直今でも色々なまちづくりであったり、再生の動きがある所で、ここに関しては2040年までにちゃんと今のこのような動きを育てていけば、結構面白いまちになるのではないかとというのが我々の印象で、既にこういうある種の、今この写真だと下町文化と新しい居住地と一緒になっていますけれども、そういうものであるとか、運河とか、あるいは我々が都市的だと感じるようなまちのにぎわいとかをどんどん増やしていく。ここにはかなり個性的なものができるだろうと。

それに対してやはり問題はLじゃないかと。Lは何が問題かということ、まだできていないのにもう古い。この古いLというものをどのように、まだできていないのにリノベーションするかというところがポイントなのかなということを、今議論しております。ここは都市と臨海部のまさにハブであり、大きなにぎわいを呼ぶ可能性はあるわけですが、圧倒的にスケールアウトしていて、公共空間が、もう少し色々なスケールをミックスしないといけないよねという話を色々していて、今は、特に交通手段が基幹鉄道で来てあとは徒歩での移動となっている。

徒歩は正直歩きたくないという状況なので、もうちょっと間にある色々なモビリティを

この中に入れていくのをしっかり考えよう。その中には自転車もあるし、舟運もあるし、ロープウェイもあるし、何でもいいんですけど、そういったもの。特に海を越えていくようなものも含めて考える。

内容としては、これはあくまでシーズというか、どれかということじゃないんですけども、色々なデベロッパーの方々が今まさに考えていらっしゃるような、こういうコンテンツであればここはできるといったようなものとか、将来やりたいものを書いてあることになります。

ナイトタイムエコノミーとか、I Rとか、M I C Eとか色々あるわけですけども、そういったものを、このLという空間を再編させながらどうやっていくかということ、今議論しているところです。色々なビジョンがありそうですけれども、なかなかこれだということにはなっていないところです。

問題は、このLまではそういう意味では作り変えるという話ですが、XLに関しては、先ほどのグループからの発表でも、ある種の実験都市とありましたが、我々としても、一つシステム、もちろん何かを生み出すシステムをちゃんと提案した方がいいのではということを考えています。

今、コンテンツを提案すると、それは必ずしも20年後までの何かにはならない可能性があるということ、今の湾岸道路から南側、ここをある種切り離して、ちょっとここでは書いてはいないですが、我々としてここはもう未来の居留地のような形で、先ほど制約からの自由とありましたけど、まさにそういうものとしてこの部分は考えられるのではないかと考えています。

中身はこれも色々書いてありますけれども、そのようなことを少し空間として分けて考える。もちろんSとかMとかLとかでも実験することはあると思うんですけども、やはりこの強みは、海に開かれていて、海という大きな自然資源があって、かつ先ほどの物流空間もあって、かつやはり東京という、非常に世界でも希有な文化的集積との近接性がある実験空間だということ、これはおそらく世界の色々な実験空間に比べても強みがあるのではないかと。

だけどイメージになった途端に既存のものになってくるとちょっと面白くないんですけども。色々なことがあり得るんですけど、技術としては、やはりこの海洋とか海みたいなものをどのように解放できるか。ここは陸地の制約だけじゃなくて、海の使い方の制約も解いていったほうがいいのではないかと。そのとき海は、人間が利用するだけじゃなくて自然生態

エコシステムもものすごく大事な部分なので、そのこととの関連の技術をやはり伸ばしていくことが、東京、あるいは日本という所が世界の中で果たす役割となるのではないかと、ということです。あとは先端的物流もです。

今そのようなことを、少しSとかMとかLとかXLで分けて議論しているところがあるんですけど、実際にはそれを一体としてどのようにデザイン、マネジメントを行うかということが一番大事だったり、あとはやはり、先ほど村木先生から意思決定のスピードの話があったんですが、まさにそこが一番大事だと思っていて、そこをどのように変えていくのかということ。

我々のイメージとしては、本当にあそこだけを、もう東京都から切り離れたほうがいいのではないかと、ということを言っているんですけども、少し既存のこの非常に重たいシステムから切り離して、ある種の自由の所にする。ただし資金については色々面倒があるので、色々なことを今考えている。公共地の現物出資であったり、民間資金によるLLPとか、そういったものを取り入れながら、今のXLをデザインしていくことが大事なのではないかということが、我々の提案の今の話です。

最終的にどうなるかというのは、色々なシナリオがありそうなのですが、イメージしているのは、SとかMとかLごとにやって、それが固定化しているわけじゃなくて、特にLの空間に関してはSとかM的なものを多分含めていかないと、魅力的な都市空間にならないことになっていくだろう。内海のこのXLに関しては、20年後にそれがSになっているのか、Mになっているのか、XLのままなのかどうかというのは少し分からないけど、幾つかのシナリオは描けそうだと、今議論しているところでございます。

以上になります。

【村木コーディネーター】 ありがとうございます。

多分全部聞いてからのほうがきっと色々なことを言えるのだろうという感じがするのですが、先ほどの最先端技術のまちワーキンググループの方から考えると、今のご説明の中のXLのエリアの感じですね。Lの所というのは先ほどのお話の中でも、でき上がっていないのもう変えていかなければいけない、そういうご説明があったと思いますけれども、こういう所はどうしていくのがいいのでしょうか。

つまりSとかMというのはかなりでき上がってきていて、そこでのビジョンは今のものを維持するとか、それからそこにリノベしていくにしても、何らかの方向性が見えやすい。ところがMはかなりまだ残っている所もあり、それでいて東京の魅力をつくっていくのに、

もしかしたら最適な場所になり得るかもしれない。そのところについて、こういうまちをつくっていくという観点で何か特に出ているのかということ、最初にお伺いしたいです。

【中島座長】 まず実験空間との関係ですが、決してSとかMとかLが実験空間ではないということではなくて、私の印象だと先ほどの最先端技術の提案の中にも、どこでやるべきかという違いがあって、それを一緒にするとあまり面白くなくなる。Sでやるべき実験とLでやるべき実験は多分あると思っていて、Lでは、それこそこのモビリティとか、人が生活しているの、その生活者がいないと実験できないような空間。

ちょっと話が変わりますが、今日まさに内閣府からスーパーシティみたいな話が出ていて、そこで人をどうするか。要するに実験はできるんだけど、生活がない所での実験になってしまうので、どうその生活のある所という話ですが、そういう意味で言うと、Lというのは、やはり生活者がいる中での、あるいは消費者とか、ショッピングで来ている人たちがいる中で、ある種実験的な試みというのはたくさんやるべきと。ただそれは逆に言うと、確かにこのバイエリアだからやらないといけないこともあるけれど、別に他の都市でもできるかなという気もしていて、そういう意味ではそれはやって再生させていくものであり、XL的な空間を実験場としてもそこはもう徹底的に、ここでしかできないような実験をしていくのかなという切り分け方を、今まずしているということです。

その中で、Lの空間については、アイデアとしてはここでご提示させていただいたような16ページとかでの議論になっていまして、なかなか難しいんですけど、この辺のものの中からどのように焦点を絞るか、そんなことを考えているところです。Lにも実は結構色々あって、お台場と上の方の木場とかは全然違うので、どういうふうを考えるかというのを今まだ議論しているところで、具体的に一つ、我々の議論として何か決定打が出ているということではないような状況です。

【村木コーディネーター】 分かりました。あともう一つお伺いしたいのが、20ページのところなんですけど、実現に向けたエリアマネジメント、これの2つ目のところに書かれている「意思決定から実現までのスピードアップ」、この辺というのは既成制度をどうにかする。これは全ての地域に対して言っていることなんですか。

【中島座長】 そこがバイエリアの全ての地域でやろうとすると、多分制約があってスピーディーなものにならない。バイエリアの中にも既に人がいて、まちがあるので、そういう意味ではやっぱりXLに特化した、ある種の制度はつくるべきじゃないかというのが

我々の議論です。つまりLまでとXLはやはり違う世界としてデザインしていったほうが、XLの特徴を生かせるのではないかということです。

だから当然Lまでの所にも規制の緩和は必要だと思うんですけども、その段階とXLでの段階とは少し違うのではないかというか、そういうことを考えるのがいいのではないかということで、答えとしては一通りではない。その辺がどこまでできるかを厳密に考えたときに、やはり少し違ってくるということを我々は考えていて、XLはもう思いっきりというイメージです。Lは思い切るんだけど、やはりなかなか現実的な面から考えると少しできないこともあるのではないかと、そういうことを今議論はしています。

【村木コーディネーター】 ありがとうございます。

岡村先生、何かありますか。

【岡村座長】 エッジの部分というか、XLとLの部分とか、その境の部分がどうなっていくのが結構気になるんですけど、もともとやはり隔絶されたような空間というのがこの特徴かなと思っていて、そういったものをより強調していくのか、もっと溶け込んでいくようなことを目指すのかというところを、もしお考えであれば。

【中島座長】 2つの、もちろん両方の方向性はあるんですけど、我々としてはやっぱり溶け込むというか、このLとかXLがただ単に共存しているんじゃなくて、それが結ばれるようなアイデアを考えていこうということを今議論してしまして、答えとしては、多分エッジの部分は重なり合うというか、そういうものを考えたいということです。

そのエッジのラインは、この湾岸道路の少し南というか、そのあたりにありそうなんですけど、そこは端的に言えば物流空間と都市空間との境目であったりして、今は完全に別ですが、そこを何とか少し溶かしていくと、物流と自然と都市の3つが共存しているのがこのベイエリアです。これらが共存することの価値みたいなのが目に見える形で示せないかというので、その具体的なアイデアはまだ概念的なタイムシェアとかそういうことになっています。

ちなみにそのあたりの話は、もう一つは先ほど最先端技術というのがあったんですけど、やはり物流の空間が将来20年後どうなるかというのが、結構我々も分からないところがあって、物流の技術の発展によっては、今コンテナを後ろに置いているヤードがありますが、そういうところも要らなくなって、むしろ都市側のほうが海に近づいていくようなこともできるんじゃないかとか。20年の間に多分既存のラインを決めている条件が変わってくるので、その辺をうまくデザインしていくことで、混じり合うようなことができるのかなと

か思っているんです。もちろん混じり合うことでのデメリットも色々あるので、どこまで現実的に考えるかという問題はあるんですけども。

【村木コーディネーター】 分かりました。もう一つお伺いしたいというか、私の意見ですけども、私はずっとイギリスの都市計画とかをやってきていて、かなり条件の不利な地域の都市再生というのを、すごくイギリスはうまくやってきているんです。そういうのを考えたときに、このバイエリア、特にXLとかLと言われている所って、かなり条件がよろしくない。東京の都心に近いけれども、民間投資はそれほど活発に起きているわけではなくて、その辺の不利なものを変えていかない限り、東京がほかの所に勝っていくってなかなか難しいと思うんです。

ロンドンなどでは、ニューヨーク、パリではなくて、ロンドンで消費をしてもらうためにはどうするかとか、世界で1番になるためにというのを考えたときに、東京には結構足りないものがたくさんあって、その辺がもしかしたらここで何か新しいビジョンをつくって、民間のデベロッパーの人がたくさんいる中でワーキングをやられていて、こういう規制がなかったらとか、こういうことができたなら東京がもっと魅力的になるのではないかと、そのような話は出ていないでしょうか。

【中島座長】 東京にないものというのは結構議論していて、それこそ超富裕層のまちなどはなくて、そういうものが確かにこのバイエリアにできて、それはしかも日本の資本ではなくてもよくて、例えばドバイのようなものがここに来てもいいかもしれないという議論はありました。ただ難しいのは、色々なビジョンがある中で、我々としてはまず今そのビジョンを、将来を生み出すためのシステムというか、そういうものをちゃんと埋め込まないといけないのではないかと考えていて、それがなかなか難しい。まだ1つに絞っていくような段階ではなくて、色々なアイデアを出している段階なので、その中では今のような話は出てはいるんですけど、東京に足りないものがこれだから、ここにこれを今つくるべきだという論理の構造には、今の話だとなかなかないかもしれないです。

【村木コーディネーター】 分かりました。では、今度は岡村先生のワーキングのご説明をしていただいて、それからまた全体で議論したいと思います。

【岡村座長】 岡村です。よろしくお願いいたします。活力と躍動感のあるまちワーキングから提案します。

まず現状認識ですが、例えば観光地ということを見ると、まだ十分に観光対象として

活用されていないものが多いのではないかと、例えば産業空間であるとか水辺空間です。あるいは宿泊施設は対象が限定されていて、日帰りが多く、泊まっていく人が少ないのではないかとということとか、一方で、観光的にはエンターテインメント、ショールーム、展示場などで多様な消費空間を有している、そこはポテンシャルではないかと考えています。

交通アクセスは、先ほどから話が出ているようにアクセスが問題であったり、域内の交通手段が十分に確保されていないとか、産業空間と都市空間が混じっていますので、コンテナ車の往来が観光者に対してあまり良くないのではないかと、あるいは羽田空港とかこれから整備されます客船ターミナルは、世界とつながる玄関口になるのではないかなど言われております。

産業面では、先ほどのエンターテインメントや商業施設が臨海副都心では多いということ、一方で、その周辺には倉庫、工場などが集積していますが、近年はそこにアートやデザイン関連の企業、人材が注目して、拠点施設や人が集まってきている状況もあると見ております。

空間利用としては、埋立地ということもありますが、場合によっては地元意識とかコミュニケーションが不足していることがあるのではないかと、あるいは工業専用地域なども含めて画一的な土地利用が多くて、例えばアートと工業の融合とか、そういった新たな価値が生まれにくいのではないかとこのことを考えております。

我々はミナトリエでワークショップ形式での議論や、複数の地元の企業さんにお話を聞きながら、色々インスピレーションを得て提案をまとめてまいりました。その過程の中でキーワードとして皆さんに色々挙げていただきました。例えば「非日常感」がやはりベイエリアにあるのではないかと、あるいは「人工的」とか、コンテンツとしては「和風」や「最先端」とか、そういったものを生かしたいという話です。そもそもまちのコンセプトとして目指す方向として、「オープン」であることは重要だとか、「未来」を目指していく、そのときに「JUMP」が必要ではないかと、そういったさまざまなキーワードが出てきました。

それらを踏まえてコンセプトとしては、まちや人が生き続けるための接点がこのまちにあるのではないかと、その接点を大事にしていったらいいのではないかと考えております。

具体的に接点とは何かといいますと、過去と未来の接点、あるいは今ある「もの」と新しい「モノ」の接点、日本と世界の接点、それと、少し変わった言い方では、この世とあの世の接点、そういったものが実は色々な土地利用とか施設を踏まえて、このまち、ベイ

エリアにつくっていくことができるのではないかと考えております。

具体的な提案内容を4点大きくまとめております。1つは何度でも訪れたいまちと
いうことです。2つ目が多様なライフスタイルを支えるまち、3つ目がシビックプライド
を醸成するまち、4つ目が未来への実験都市としての姿を描くまちということで、4点挙
げております。

1つ目の何度でも訪れたいまちですが、バイエリアの立地の特性上、やはり隔絶さ
れたという部分が、弱みでもあり、それを逆に強みに変えることができるのではないか。
つまり滞在型のエリア、例えば都心の新宿と上野とバイエリア。今までは連携しながらの
観光地、観光行動というのが生まれていると思うんですが、ここで滞在型の観光地として
転換していけないだろうかということで、例えばコンテンツの例としましては、臨海部や
産業、あるいは水辺、あるいは世界への玄関口という特徴を生かして、魅力あるコンテ
ンツを創出していこうと考えております。これは例としてですが、世界中の作物が育つよ
うな大きな棚田、シンボリックなものですけど、こういったものはどうだろうかという話も出
ております。

あと、右側は宿泊施設の問題で、現在は特定のターゲットにフォーカスしたようなホテ
ルが多いわけですけど、より多様な人を集めるような宿泊施設を提供していったらどうか
ということです。自然環境をうまく生かしたようなホテル、旅館なども考えられるんでは
ないかと思っております。

2つ目ですが、和とテクノロジーの融合でグローバルの中のオンリーワンにということ
で、やはり日本といえば先端技術がある国というイメージがあるわけで、それを観光コン
テンツにうまく生かせないだろうかということです。また和風の部分も外国の方からする
とやはり魅力的な要素であるということで、グローバルに訴えかけるような和風とか先端
の部分を生かしていきたいということです。また、その大空間を生かしたようなレインボ
ーブリッジで綱引きとか、コンテナかくれんぼとか、色々さまざまなアイデアは出ており
ます。

提案の柱の2つ目ですけど、多様なライフスタイルを支えるということで、多くのまち
が抱えるような人口減少、少子高齢化、外国人の増加など、そういうさまざまな人に対応
できるまちにしていきたいということで、1つ目に、その多様なニーズに応えるまちの受
け皿づくりをしていくべきだということで、高齢者向けではなくて、最先端の分野とか技
術を高齢者が体験できるようなデバイスとか空間というものをできないかと考えておりま

す。

2つ目に、アートやデザイン、ファッション、映画、音楽などのクリエイティブ産業や人材が集うような拠点を整備できないかと考えております。

提案2の2つ目ですが、人と人とのつながり、コミュニケーションが生まれるまちということで、コミュニケーションを活性化していこう、そのためにさまざまなデバイスとか、分かりやすいアイコンみたいなものが必要ではないかということとか、先ほどこの世とあの世という接点の話を出しましたが、例えばこの世にはいない祖先や偉人を最先端の技術で再現して出会う。これはトップアーティストみたいなものから、自分たちの祖先みたいなもの、そういったものを技術で再現して、このバイエリアでそういった方たちに出会えるような場をつくれないうか考えております。

3つ目の柱として、シビックプライドを醸成するというところで、オリンピックのレガシーもあると思いますが、やはりスポーツをうまく生かせないかということで、バイエリア発のプロスポーツチームや世界的イベントを誘致できないかと考えております。プロスポーツチームを誘致して、地元密着型のイベントとして定着できないか、あるいはモータースポーツなどの世界的イベントを誘致できないかと考えます。

2つ目として、海があるまちを都民の誇りにということ、このまちにどれだけ愛着を持ってもらえるかということが大事だと思っています。その中で、生きているうちからバイエリアに一生愛着を持てる環境づくりができないかということで、例えば公園などもそうだと思いますが、霊園とかお墓、墓地みたいなものを検討することで、生まれて育っていく中で、バイエリアに対して時間をかけて愛着を持っていけるような仕組みがつけられないかといったことを考えております。

また、このバイエリアで実現するだろうさまざまな最先端技術とか、あるいは環境を体験できるような施設とか空間を一斉に公開して、そういったものを通じてまちのPRをして、まちの愛着を育むようなことができないかと考えます。

もう一つ、バイエリアを一体的に国内外へ発信するというところで、まちの歴史もそうですし、今まちがどう動いているか、その状況を伝えるようなビジターセンターが必要ではないかと考えております。

提案の柱の最後、4つ目ですけど、未来への実験都市ということで、これは先ほど話のあった最先端技術のまちワーキンググループのところとも随分重なりますが、規制緩和を行って、バイエリアを最先端技術の実証実験の場にできないかと考えます。また具体的に

は、特定の分野に特化した企業であるとか、大学、研究室を施設として集めて、未来型のオフィス、ファクトリーがつかれないかということです。

もう一つ、実験都市における企業、都民とのかかわりということで、やはりお台場も含めて、消費空間とか、既存のまちもありますので、最先端技術を具体的にB to Cの形で実験、体験できるような場の可能性が、ここにはあるのではないかと考えております。

最後ですが、既存の都市空間の再編ということで、新しい部分だけではなくて、やはりベイエリアの既存のまちに対しても再編を促せないかということで、用途制限のある地域において、ニーズに即した土地利用ができないかとか、あるいは広大な公共空間がありますので、そういったものを占有しやすくしたり、あるいはにぎわい創出できるような仕組みができないかということを考えております。

盛りだくさんで色々ですが、このような提案になります。以上です。

【村木コーディネーター】 ありがとうございます。それぞれ別々のワーキングですけど、オーバーラップしている部分もあるなという感じがしたのですが、今のお話をお伺いしても、場所のイメージはありますか。提案用途をお伺いしていると、具体的に先ほどの感じだと、Lというエリアのイメージの中で実験などを考えるという感じでしたけれども、それ以外のところで、こういうところでというイメージは何かあるでしょうか。

【岡村座長】 宿泊施設などはやはり、よりまちに近いほうがいいと思っています。自然公園が既に整備されている所とかをイメージして、自然の中で自然を享受しながら宿泊ができるとか、そういった場所がいいのではないかと考えていますし、あとは、例えば大井埠頭とか、既に都市化している部分に対しても何かできないだろうか、そこを例えば観光のコンテンツとして生かせないだろうかということで、既存のまちをどのように生かすかという発想も、我々のワーキングでは強く持っているなと思っています。

一方、この棚田のように、今までできなかったような大規模な施設とか、シンボリックなものも必要だということで、それはちょっと具体的にどこかというところまでは検討できていないんですけど、新しい所でというのも考えております。

【村木コーディネーター】 あとは先ほど出てきた提案3、この辺なんかはどうなんですか。霊園とか、見たときすごくびっくりしたんですけど。

【岡村座長】 なかなか中央防波堤の南側とかは、今土地利用が難しいと聞いていまして、そういう所で何かうまくお墓とかだったらできないのかなとか、やはり一番フロンティアの部分というか、なかなか日常的な土地利用が難しい場所で、こういったお墓なんか

ができるのではないかという提案もありました。ただちょっと具体的にどここというところまではイメージができていないんですけど。

【村木コーディネーター】 なるほど。中島先生、何かありますか。

【中島座長】 すごく面白いなと思って聞いておりました。今の霊園とかで思うんですけど、バイエリアを考えると、一つバイエリアの中だけを考えるのもあるのですが、いわゆる連鎖型の再開発ではないけれど、バイエリアにこれをつくると、都内のこれが要らなくなって都内が変わるとか、そういう枠組みももしかしたらバイエリアの役割としてあるのかなという気もしています。例えば上野動物園をバイエリアに持ってくるというのではないかというような話は、別にバイエリアの中だけで完結して、バイエリアにあるべきだというだけではなくて、上野がどうあるべきかという話との関連で議論ができるわけです。ここにあるコンテンツというのは結構そういうものもあるのかなと。

例えばこの霊園なんていうのは、実際はないかもしれませんが、青山霊園がもし別の利用になったらどうなるかとか、色々な考え方があるかとは思いますが、そのような議論は何かありますか。

【岡村座長】 ないですね。まだそこまで発想が及んでいなかったですが、確かにそうだなという気はします。

【村木コーディネーター】 その辺の話は東京全体とかの話になっていって、かなり拡散していってしまうような気もするんです。大事なことではあると思うんですけど、少し難しいのではないかと。

【中島座長】 若干絞って。多分大学とかそういうのに絞ると、もうちょっと可能性は、議論することはあるかもしれないとは思いました。

【村木コーディネーター】 ここで全体を見ながら考えていきたいと思うんですけども、最終的には今日の最後のところで、庁内検討委員会への提案内容、何かこういうのを検討しないといけないということがありますが、3つのワーキングを聞きながら、こういうことを考えていくといいんじゃないのかということをお伺いしたいと思います。

私自身全体を聞いていて思ったことが、何となく場所だけが決まっていて、ここでビジョンをつくるといっても、そのビジョンの方向性というのがまずそもそもみんなの中で共有されているわけでもないし、何かがあるわけではないんです。だからある程度何か方向性がないと、この後ワーキングで話しづらくないかなと聞きながら思ったんですけど、そのあたりどう思われますか。こんな色々なアイデアが出てきて、そこからつくっていけば

いいと、そういうことなんでしょうか。

ただそのアイデアを出すといった際にも、この後、このエリアがどうなっていくべきなのかという命題のようなものが共有できているほうが、やりやすいのではないのかなという感じがしたんです。私自身なんかは、やはり世界の中で東京の位置づけはすごく大事だと思っているので、特にXLとL、その所でどんな足りないものを入れていくとか、土地利用の再編とか、民間投資がここで起きやすくなるとか、人がたくさん来たいと思うとか、その辺のことを実現できるものが大事のように考えるんですけど、その辺ワーキングを含めて、また座長の先生たちはどんなふうにお考えでしょう。

【中島座長】そこは共有できているかなと思います。要はこれを誰がつくっていくのかというときに、当然これはさまざまな民間投資が入ってこないと無理だというのは分かっています。ただ先ほど村木先生がおっしゃったように、多分Lについては、民間投資はすぐに入る可能性はあるんだけど、どうXLにも将来的にその民間投資を入れるための、間をつなぐというか、いきなりは入らないような気がしています。そうすると、どう民間の投資が入るような魅力を高めるかとか、先行的に何をやるかということ、我々は実験と言っていますが、ずっと実験であるということでもなくて、将来的にはそのうちの何かが定着したり、具体的なお金が入って開発してもいいかなと思っているんです。

だから実験都市というのは、本当にそのビジョンになり得るかみたいなところがあって、つなぎなのか、それともずっと実験しているのみたいな話、少しこのあたりは議論が必要なのかなと、そんなことを我々のところでも今話しているんです。だから民間投資を引きつける世界の中で、やはり東京の魅力を打ち出して、できればロンドンとか、ニューヨークとか、パリなどと競争力があるような場所をつくりたいということは共有しているんですけど、要するに3つでこのキーワードとしては実験ですよ。

【村木コーディネーター】そうですね。

【中島座長】その実験って何なんだろう、何のための実験なのかとか、実験は本当にコンテンツなのか手段なのかとか、その辺が若干まだ違いはあるのかなと思って聞いていた感じです。

【村木コーディネーター】岡村先生、何かありますか。

【岡村座長】土地としては非常に広大ですよ。リソースも限られている中で、どこでどう動かしていくのかという、その配分みたいなものがすごく大事なかなと思っています。例えばアーティストとかクリエイターみたいな人をここに呼びたいという意見が結構

強いんですけど、でも、やはり既存のまちに引きつけられる人たちと、ここの新しいまちに引きつけられる人たちと、色々な人たちがいるので、同じアーティスト、例えば技術者もそうかもしれないんですけど、どこでどういう人たちが動くのかという、それぞれの人の種類というか、誰がどこでということ意識することが大事かなと思っています。

【村木コーディネーター】　そうですね。そうすると多分ワーキングの中で結構場所のイメージというものを持ちながら、ここでこういうアクティビティとか、人を呼ぶためにはどうすればいいのかということの議論が、もう少し必要になってくるのかなという感じがします。先ほど最先端技術のまちワーキンググループではドローンとか、規制でなかなかできないものがあって、日本はなかなかやりにくいという話がありました。新しい技術を育てて、ここに最先端のものがより実現するような形にしていくためには、規制が緩いという言い方がいいか分かりませんが、それが実現できるようなものが人を引きつける。

そうだとすると、アートとかアーティストといったときに、引きつけるとか、こういうことがあったらもっとそういう人が来るとか、産業が起きるとか、そういう何かないですか。何かもしそこですぐに思いつくことがあれば、またはこれから先のワーキングの中で、こういうことを緩和すると、新しい地域のバリューアップが図れるんじゃないのかという議論なんかをしていただくといいのかもしれないなという感じがしました。

【中島座長】　我々もアートとか否定はしないんですけど、ちょっと議論していたのは、XLとかで、やっぱりスケール感がすごく大きいんです。多分アートというものでちょっと処理できないというか、埋まらないだろうという感覚があって、やっぱり場所のイメージとコンテンツの関連が結構大事で、例えばアートだったら、Lぐらいまでだったら何となくイメージができるけど、XLってもうちょっと大きなスケールを使うような何かを提案する必要があるんじゃないかということ議論していたので、そういう意味では村木先生がおっしゃるように、一個一個の提案が、どういうスケール感とかどういう場所に加わるのかという、その整理は必要と思います。

XLが正直、細やかに今考えていくこととか、細やかにお金を入れていくことが多分できなさそうなので、もうちょっと軽やかに少ない労力ででも次につながるようなものが何なのかということか、あるいは超ビッグな、もう我々の視野の外にいるようなものが入ってくるぐらいじゃないと難しいなということを考えているんですけど、そのあたりはどうですか。まだ多分全然共有できていないと思うんですが、XLのイメージということになるんですけど。

【岡村座長】 先ほど少し話があったと思うんですけど、産業がどう変わるかですよ。例えば青海とかもコンテナ埠頭が今あるわけです。そういったものがどうなるか予測ができないと、結構そのXLの部分も青海とか中央防波堤、羽田空港がわりと大きく占めているような気がするんですけど、思い描いているものが使える土地になるのか検討する必要があるのかどうか。

【中島座長】 そうですね。

【村木コーディネーター】 そのあたり事務局の方はどう考えているのでしょうか。XLの所はこのビジョンを考える際に、外側の所をどこまで議論していく方がいいのか、もし何かあれば教えていただきたいのですが。

【伊東計画担当課長】 今後、ご提案をいただいた上で、庁内検討会で具体的な行政計画の議論を行うことになるので、20年後の土地の使い方がどうなるのかを、今お示しできるような状況にはありません。このため、自由な発想のもとで、夢を描きご提案をいただければと思います。

【村木コーディネーター】 ということは、自由に提案してもいいということだと認識しました。土地が確かにすごく大きい。可能性は色々ある。さっきから出てきたのは実験とか最先端とか、それを実現するための規制の緩和、この辺のことが今日はすごく大きなキーワードな気がするんです。だからある意味XLの所については、そういう最先端のものを、時間軸も、あまりどういう形でやっていくのがいいのかも少し見えないところはありますけれども、アイデアベースではかなり新しいものをやる所という感じがいたしました。

それ以外の所が少し難しい感じがします。特に私はLの所が難しいとっていて、使われている所と使われていない所、そしてここが本当は価値の創造をすごくやりにくいはずなんです。やりにくくて、中島先生は民間投資が結構起きると。私は投資が起きないから土地が余っているんだと思うんですけども、それを呼ぶためには一体何をやっていって、より大きな魅力をつくっていくことができるのかという気がするんです。そこのところを何か、こんなことをやるというのはないでしょうか。

【中島座長】 一つ投資が起きていない原因は、現状での交通だと私たちは思っていて、交通はやっぱり今の選手村もそうなのですが、基幹的な交通ができて少し状況が変わることと、それに加えて、交通だけじゃない魅力的なネットワークのインフラ、それも通信という意味ではなくて、人と人が出会う場所とか、そういうのがすごくうまくできれば、何

か次のことが起きないかなと思っているところがあります。

2040年までに交通の状況は変わるということがまずあると思うのですが、その交通のつくり方をどうするのか。今のビジョンだと、地下鉄とか、非常に規模の大きなものが入ってきて、結構駅間距離もあってみたいなどころなんですけど、例えばそこをもうちょっと変えていくことで、いわゆる駅勢圏が変わってきたりとか、そういうことは、我々のこの魅力あるまちづくりワーキンググループでは考えられるかなということを議論していました。

特にこの湾岸道路の所、今回は提案しませんでした、軸が必要かどうかというような議論もあって、今のこの湾岸の鉄道が通る所ですが、その辺に交通とかのインフラの公共投資をある程度してから、その結果土地の価値を上げていくというのが考えられるストーリーなのかと思っています。

【村木コーディネーター】 その際にこれから先のワーキングの中で、多分公共交通のインフラ投資というものを公共にお願いしながらやっていく。その上物の所をどんなふうな魅力としてつくっていいのか。それは既にある程度の公園だとか整備はされているにしても、見直しをしていかない限り、できていかないですね。こんな提案があったら、よりこのまちは魅力的になるのではないのかというものを考えたほうが良いように思うんですけれども、どうでしょう。

【中島座長】 おっしゃるとおりで、そう思います。でも幾つか他のワーキンググループの中で少しそういうイメージもあったりして、我々も考えるんですけれども、それは当然ないといけないんですが、多分もう少し議論の熟度が必要なのかなという感じなんですけど、この今日3つのグループの話聞いていても、どれかということになるのかどうか。

むしろどうですか、村木先生としては、多分今色々なシーズは出ていますよね。まだどれも熟してはいないけど。どの辺にまさに将来の土地利用の基本的な方向が見つけられそうか、その辺の印象をもし教えていただけると、むしろそこから我々も考えを深められるように思うのですが。

【村木コーディネーター】 私は結構この実験のXLの所というのは大胆なことを言ってもいいと思っています。なので、新しい技術をここで実験するとか、それで世界から人を呼ぶとか、そのために今ある規制を緩めるとか。そこは多分皆さんそんなに大きく意見は変わらなくて、そこにもしかしたらさっきのお墓みたいなのが入ってくるのかもしれないし、そこを提案という形でまとめていくのはどうかなという感じを、今日の話伺いな

がら思いました。

SとMの所というのは、多分ビジョンとしてはそんなに細かくつくる必要性というのはなく、今ある価値みたいなものを残していくとか、その中に今日の岡村先生のご提案にあった、例えばホテルの話とか、外国人が何とかというものを大事に入れていくとか、それはあると思っています。

極めて難しいのが私はLの所だと思っています。Lのつくり込みをどういうふうにしていくのか。それはハードでもそうだと思うのですが、ここでやれる実験とか、それからあとは価値を上げるためにどんな活動があったら、東京ってやっぱりすごく面白いと思ってもらえるのか。これはだから多分ほかのワーキングの中で出てきているものをどう取り入れるのかということと、土地の再編をもう少し念頭に考えていただくといいのかもしれないなという感じがしています。

【中島座長】 ありがとうございます。我々の議論の中でも、もともと実はS・M・LとXLで分けていたのですが、やはりLは全然違うから、Lを切り離して、今こういう形になっていて、検討課題というのはまさにそういうことなんですけど、どうやって決めていくかはこれから考えていきます。

【村木コーディネーター】 ある意味提案なので、このキーワードというのがここに今並んでいますよね。これを膨らますというのもあるでしょうし、実際に土地の中でこういう使い方をこのあたりはするといいというのを書いてしまうのも、一つの手ではないかと思います。その中に交通という形で、自転車もそうでしょうし、BRTとかトラムとか、さっきの自動運転とか色々な新しい技術の導入、こういうものの他のワーキングから出てきているご提案を入れていくとか、そのイメージをみんなで共有できるといいですよ。

【中島座長】 なるほど。そこが我々のこのワーキンググループの役割だと思っています。なので、多分その方向で検討は進めると思います。

【岡村座長】 多分既存の都心とXLの部分をつなぐ所ですよ。我々のワーキングでは、割とそこが隔絶されているというのが、ここの弱みでもあるし強みじゃないかなということを行っています。もちろん交通が充実することはいいと思うのですが、観光のことを考えると、滞在型を目指して、少しうまく分けるようなことがあってもいい。

【中島座長】 切るところですよ。だからそういう意味で、Lの所が本当に観光的にいくのか、今の商業の消費的なことでいくのか、あるいはもっと居住が増えるのかとか、

そこをどう考えるかなんです。そのあたりも今なかなか決め手がない。だから観光だということ、まさにこういう場で方向性がある程度決まると本当はいいと思うんですけど、多分3つが組み合わせだとかなくなっていくと、今と同じだなみたいになるんですが、その辺が難しいなどは正直思っています。

今の接続の話もよく分かります。この将来像はどうですかね。

【村木コーディネーター】 多分東京都庁にいらっしゃる方たちはどんな提案が出て、それはワーキングの中でやっただご提案だからと言われると思うので、自由に考えるのがいいんだと思うんです。だからここに魅力というのを考えたときに、人間がそこにいることがいいのか、または人が住んでいない所ってあまり魅力がないのかもしれない。ただ、その地域とかその場所の特性、それとあとはそこでしかできないことを考えるという観点から、人のあり方は、居住なのか、または宿泊なのか、そこもありますよね。

【中島座長】 はい。

【村木コーディネーター】 そうなると、私はそれは難しいんじゃないのと先ほど申し上げましたが、東京全体の中でこの持つ意味って何なのかということも、少し考えないといけないことなのかもしれないですね。東京全体の中で不足しているものは何なのか。世界の都市と比較して東京に足りないものは何なのか。実験ができる大きな土地がある、そういうものを抱えているこのエリアだからこそ、やれることって何かですね。それがあれば投資も集まって、結構多くの人がここに来るにぎわいがつくれるのではないかな。そう考えると、どんな実験ができるかです。

【中島座長】 我々の中の議論で、例えばこれでSとかMがあって、そこはある種のヒューマンな限界があって、当然LもそういうふうにSとかMを入れていくというものもあるんですけど、でもそれは逆にこの個性を消すというか、この可能性を少し消してしまうのかなという議論があったんです。それはどう思われますか。要するに今明らかにLって、非常に公共の所も閑散としていて、もう足元とかも全然だめなんです。そこにやっぱりS的、M的には入れていく。

当然ですけど、でもそれだけがビジョンになってしまうと、ここの持っているL的な、だからできることというのがちょっと消えていってしまって、中途半端なS・M・L・X Lができちゃう。だから、やっぱりこのL的な要素は、強みとして何とか捉えるような提案をしたほうがいいのではないかな。S・Mは当然やるんだけど、やっぱりL的な所はどこだと、そこをやりたいなというのが方向性としてはあります。

【村木コーディネーター】 そうすると大きなブロックを生かしたもの。

【中島座長】 そうそう。

【村木コーディネーター】 そうですね。ただ、公園空間が本当にいいのかというのは、若干気になるところではあるんです。そのつけかえとかも含めて、多分自由に発想したほうがいいような気がするんです。

【岡村座長】 私のグループはコンテンツ系、イベント系なので、そういう意味ではスポーツイベントとか、大空間ならではのアクティビティというのを、提案としては出させてもらっています。ただ瞬間利用というか、非日常的な利用になってしまうので、少しそれがどう日常に定着していくかというところのストーリーも必要だとは思っています。

【村木コーディネーター】 つまりそうすると、非日常的な利用というか、瞬間的な活用という、今の空間はすごく広いじゃないですか。あれをそのまま活用するということも可能と考えていいですか。

【岡村座長】 多分ここに挙がっているモータースポーツ、F1とか飛行機のイベントとか、最近よくやっていますよね。ああいったものは多分今の空間にちょうどフィットするんじゃないかということです。

【村木コーディネーター】 なるほど。そうするとそういうイベントとしての活用の可能性はいじらないでもできると。ただ、そのイベントがない時にもそれがうまく使われるような状況にするには、何をすればいいのか。その辺が何か多分ほかのワーキングからも含めて考える必要がある。

【岡村座長】 既にお台場なんかはイベントをやるような大きな会場があって、でもふだん行くとずっと駐車場になっていたりして、多分それを結局繰り返すだけになってしまうおそれもあるので、ちょっとまだアイデアはないですけど、どう日常化していくかということは考えないといけないかもしれないですね。

【村木コーディネーター】 ありがとうございます。追加で何かありますか。何となく発散しているようでもあり、そして方向性として何かのビジョン、特にLの所が大事だというのはそれでいて難しい。そこのところは共有できたのではないかなという感じがいたします。

【岡村座長】 何かこのベイエリアの入り口というのが、色々な所から入れるんですけど、少し分かりやすいといいのかなと思うんです。それは今で言うと、やっぱり新橋とか、ゆりかもめとりんかい線の出発地点が、このまちの入り口みたいに考えていいんですかね。

【村木コーディネーター】 どうなんでしょうか。そのところは中島先生、何かありますか。入り口はどこか。

【中島座長】 幾つかあって、やっぱり今の新橋だと弱いとっていて、だから東京の本当の都心とつなぐような線をもう幾つかつくる。それは計画であるのと、あとはやっぱりこの海側からの顔みたいなのを、このXLでつくれたらいいなというのがもう一方であって、あるいはそれは空から見たときに、羽田に降りてくるときに、巨大な緑なのか分からないけど、明らかにここに東京ならではの大きな何かがあるとか、そういうのもあるかなと思うので、そういう意味では顔は複数あるかなと思います。

XLはもう既存の計画が、地下鉄とか、実際いつまでにできるかというのはまだ分からないけどあるので、その辺の都心とのつながりはかなり増えていくと、入り口論というか、それは状況が変わってくるんだと思うんですけど、こっち側、海側とか空港側とか。特に空港からのアクセスのときにあるのかもしれないです。なかなか海からアクセスする人は現状では少ないので。

ちょっと先ほどからLが大事だということにはなっていて、それは同意するんですけど、XLをまた考えないと2040年で終わりみたいになってしまうので、その先、次はXLがやっぱり主役になってくるような時代だから、そこに向けてXLを考えていく。だからLとXLは両方大事なんじゃないかなというのが我々の感覚なんです。これからの検討としてその2つを。ただ、多分その検討の深度というか、精度が違うのかなというか。

先ほどの村木先生のご意見にあるとおり、多分Lはかなり具体的に我々なりに書いてみて、やっぱりXLはどちらかというコンセプトな、あるいはシステムとかそういうことの提案をしっかりとさせていただく、そのあたりはそういうことで大丈夫ですか。

【村木コーディネーター】 その際に、魅力を呼ぶための緩和なり提案といったものが、より深まっていくといいのかなという感じがいたしました。

そうすると時間が今日は4時半までということなので、ちょっとまとめをしたいんですけども、今日いただいたご提案ですごく大事なキーワードって色々あったと思いました。特にXLの所を中心に実験。ただその実験というのはそこだけに限ったことではなくて、Lの所も含めて、次世代型のもの、最先端のものを含めた色々な実験、交通のものも含めて、その辺のことを入れていくことが多くのところに出てきたキーワードだったと思います。

それとあとは、日常と非日常。非日常というのがかなりこのベイエリアの中にはあって、

それを大事にしていく。それはつまり、ある意味人を呼ぶということと関係していて、観光か、それは観光でないのかもしれないですけども、ほかの所にはないものをつくっていく。あとは最先端、このあたりがキーワードだと思います。

そして土地利用については、特にX L所はこれから大分先のことになるのでコンセプトは出していきたい。あとはそこで実現できるのに必要な緩和みたいなもの、これをどうしていくのか。それとあとは、空き地と開発がもう既にばらばらに進んできてしまっていて、ビジョンがなかなかつくりにくいLの所、ここの所はそれなりに魅力をさらにつくっていくための土地の再編も含めた提案、そして開発、投資が進むためのコンセプトと緩和みたいなもの、その辺がこの後、東京都に対して、こんな案が官民連携でできますという形でご提案できるといいのかなという感じがいたしました。

これにつけ加えて何かありますか。

【岡村座長】 大丈夫です。

【村木コーディネーター】 ありがとうございます。それでは、事務局の方から連絡事項をお願いいたします。

【伊東計画担当課長】 ありがとうございます。事務局から1点ご連絡させていただきます。本日の議事につきましては、皆様にご確認をいただいた上で、会議資料とあわせて、後日ホームページ上に公開させていただきます。本日の議題といたしましては以上です。

東京バイエリアビジョンの検討に係る官民連携チーム第1回総括会議を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。

— 了 —